

観光都市ポカラの多すぎる銀行と多すぎるマイクロファイナンス

Too Many Banks and Too Many Micoro-finance Families in a Himalayan Tourist Town of Pokhara, Nepal

山本勇次

要約

ネパールの都市ポカラでは、1970年代以降、観光産業が本格化し、その10年後1980年の「国民投票 (*referendum*)」以降、ポカラにはスクンバシ集落が群生するようになった。前者と後者の現象には、陽陰反転的な因果関係がある。2001年に警察力がマオイスト勢力をポカラから一掃後、スクンバシ集落群の「自治組織 (スクンバシ・サミッティ)」が不活発になり、代わって「母親会」(アマ・サムハ)が活性化しだした。ポカラでの「女性マイクロファイナンス」(FMF)はNGO機関がスクンバシ集落の母親会を主体に貧困緩和を目的に誕生させたのが最初であるが、今ではものすごい勢いでポカラの貧困層にFMFが拡大している。

現在のポカラにFMFが猛烈に繁盛している現象には、以下の三つの社会現象が同時に共起していることを理解する必要がある。第一に、ポカラのタカリ達の伝統的金融組織の「ディクール (*Dikhur*)」と、ポカラに住むグルン達の伝統「グルカ兵傭兵：ラフレ (*Lafre*)」の潤沢な年金とが相乗して沢山のディクールが乱立した。第二に、ネパールのマオイストの人民戦争の煽りで2000年頃からマオイスト支配下山村群から富裕資産家たちが安全なポカラに多く逃げ込んで銀行資金を供給したのである。第三に、バングラデッシュのムハンマド・ユヌス・グラミン銀行総裁のマイクロファイナンス運動がポカラにも到来したのである。

ポカラに来る国際観光客は1999年をピークに落ち込んでいく。ポカラの観光産業化は、初期のように潤沢な就職先をポカラに提供できなくなったが、国際貨幣市場の接触でポカラ住民の消費水準は高騰した。「利子」に無頓着な貧困層は、金が必要になれば安易に借金し、金があれば安易に他人の借金に応じてやる。そんな素朴な借金関係が累積し、同一人が多重債務者、かつ同時に多重債権者となる。彼らの借金要望に応えたのは、ポカラで多すぎる中小銀行群であった。リスクの低い「マージン・ビジネス」に集中していた銀行群が、さら

にグラミン銀行に範を得たマイクロファイナンスにも進出してきたのである。

筆者は、チメキピカス銀行女性マイクロファイナンス (FMF) のツツンガ地区第一ユニット28名の家計調査を二年ほど行ってきた。そのデータを整理しながら、FMF 家族がローン資金を利用して「貧困緩和」に成功する否かを差別化する社会的要因を抽出してみたい。

Abstract

I have been observing Pokhara, a Nepalese tourist town for more than a quarter century. Recently I have realized a very interesting phenomenon that since 1999 or 2000 a rapid expansion of female micro-finance families which are supported by “mothers’ club (*ama-samuha*)” among squatter (*sukumbashi*) communities in Pokhara. This phenomenon is, I believe, a mutually-intertwined product of the following three social movements.

The first one is a Thakari’s tradition of “*Dikhur*” (a mutual financing association) as well as Gurung’s tradition of “*Lafre*” (a foreign mercenary service). These two traditions of Pokhara have jointly produced a sum of inter-caste *dikhur* groups in Pokhara. The second is, as the result of the first, an escape of wealthy hill villagers from Maoist forces in surrounding mountain areas to Pokhara, has propelled to form a massive number of small Banks and financial cooperatives in Pokhara. The third is the arrival of the world-wide influences of Gramin-bank-method of micro-finance on Pokhara.

The decline of the arrivals of international tourists at Pokhara with the year of 1999 at peak has restrained its further development of tourist industries. Hence, Pokhara has failed to create much more jobs in Pokhara. This has led the mushrooming banks in Pokhara to the participation in low-risk margin-making business for its own survival purpose. However, once the international monetary market has landed on Pokhara, the dwellers in Pokhara have been fascinated with many convenient and delicious goods from advanced countries, and people in Pokhara have been doomed in a severe dilemma between desire for better market goods and lack of money to buy them. Then they have been gradually fallen into debt. Our research has revealed that each of Pokhara poor people is borrowing money from several persons at the same time lending money to another several persons. Their life is going on in a complex network of debts and loans.

The present author has been committed two years fieldwork survey of all the

households consisting of Chimeki Bikas Bank's Female Micro-finance Unit One through Three at Tsutsunga area, ward 15, Pokhara. This paper shows, based on the survey of family finances of each household which belongs to the FMF units, that the present author's preliminary judgement of whether each household has succeeded in alleviating poverty by making use of micro-finance loan.

キーワード：ネパール、観光都市、銀行、マイクロファイナンス、貧困緩和

Key words：Nepal, Tourism, Bank, Microfinance, Poverty alleviation

(1) 序論：観光都市の金融産業とマイクロファイナンスの乱舞：

本稿は、立命館大学文学部江口信清教授を研究代表者とする平成18年度から平成20年度までの文科省科研費共同研究「社会的弱者の自立と観光のグローバルイノベーションに関する地域間比較研究」による研究成果の一部である。これまでネパールのポカラ市で「スクンバシ (*sukumbasi*)」(土地不法占拠民) 集落群の調査に従事してきた筆者は、スクンバシ居住者の間に「女性マイクロファイナンス (FMF: Female Micro Finance)」が急速に広がるのを見てきた。本稿の執筆は、グラミン銀行方式の FMF による貧困削減の効果が盛んに称賛されているが、我々の観光町ポカラでも FMF 実践の女性貧困家族がほんとうに貧困削減に成功しているか否かを自分なりに検証してみたいという筆者の動機が出发点にある。

筆者がこの地域の「チメキビカス銀行 (*Chimeki Bikas Bank*)」の「女性マイクロファイナンス」(FMF)・ユニットの存在に関心を抱き、若干の実態調査を開始しはじめたのは、2006年夏のことであった。その時も前回の科研調査でポカラ全域のスクンバシの継続調査をしていたのであったが、同年8月に3週間、ツツガ地区で展開している同銀行 FMF 第一ユニット (5組25世帯：MC11～MC55) の聞き取り調査を開始した。このツツガ地区の元スクンバシ家族はマイクロファイナンスのグループ作りを通じて周辺の非スクンバシ・

コミュニティに融合される過程にある。

第二回目の調査は、2007年2月8日から2月19日まで短期間であった。第三回目の調査も、2008年3月10日から3月23日の短期調査であった。この時には筆者自身の健康問題で夏季休暇中の調査を実行できなくなり、健康を回復した翌年春季の時点で短い10日だけの再調査を継続したのであった。2008年度には、8月11日から9月4日まで約3週間をボカラ調査に当てることができた。この調査期間中に、最初のユニットの変化をフォローすると同時に、二つ目のユニット25世帯を調査し、立ち上がりつつあった三つ目のグループ（10世帯）の調査もカバーすることができた。しかしながら、本稿では、まだ調査資料の分析が整理されていない第二、第三ユニットには入らずに、第一ユニットの28世帯の家計家産調査を中心にしたFMFによる貧困緩和実践の評価を筆者なりに試みてみたい。筆者は、既に、2007年5月に開催された第41回日本文化人類学会で若干の研究発表をしている。この時の発表では、「ボカラ市の貧困地区の女性自治組織メンバーのマイクロファイナンスによる貧困緩和実践の成否」と題した発表であったことを断っておきたい。

〈モデルとしてのグラミン銀行FMF〉：

バングラデッシュにあるグラミン銀行創設者のムハマド・ユヌス総裁は、2006年12月にノーベル平和賞を授与された。彼はダッカ大学経済学部の教授であった頃、1976年に「アクション・リサーチ」として、銀行が融資しない農村部の貧しい人々を対象に無担保で少額のビジネス立ち上げ資金を貸付し始めたが、この試みは、とくに家庭内に閉じ込められてきた女性たちが経済的社会的に自立するための起業を促す社会的改革であった。この試行事業の成功により事業を拡大継続するために、同氏は、1983年にグラミン銀行を設立した。そしてすぐに2259支店で全国の約8万5千村近くをカバー、全国で670万人の借り手がおり、融資総額は約3千億タカ（約5千億円）に仕上げたのである。同氏は、自伝の中でグラミン銀行の創設に至る動機を以下のように述べて、極貧の農民を貧困から救い出すことがグラミン銀行の設立理念であることを明確に表

明している（坪井2006：41-41）。

今では、グラミン銀行方式のマイクロファイナンス業務は世界120ヶ国に広がっている。このグラミン銀行によるマイクロファイナンスは、途上国の貧困層の貧困削減に貢献するだけでなく、女性差別が伝統的に一般化している途上国社会で、女性の経済的自立とエンパワーメントに貢献していることが注目されている。グラミン銀行の世界の発展途上諸国の貧困層の貧困緩和への貢献の大きさが認められて、グラミン銀行総裁ムハマド・ユヌス氏は、2006年12月にノーベル平和賞を授与された。我々が本稿で後に取り上げるネパールのチメキピカス銀行は、グラミン銀行 FMF をモデルとして模倣している。しかし実際の運営は、バングラデッシュにおけるグラミン銀行 FMF とネパールのポカラにおけるチメキピカス銀行 FMF とはかなり異なるようである。その相違は、バングラデッシュの貧困で素朴な農村経済とネパールの観光都市ポカラが生み出した金融機関の乱立状況との相違が、FMF の発展・競争に相違をもたらしているように思える。

(2) 観光都市ポカラの伝統と中小金融機関の乱立：

〈ポカラの経済的伝統(1)：タカリ族のディクール〉

巻末の〈表1〉にポカラ観光産業発達の概略史が載せてある。ポカラの観光産業は1960年代末に始まり、とくに1970年代中旬から本格化した。ポカラの観光産業揺籃期におけるタカリ族とグルン族の貢献は、前著（山本、2009：23）で既に紹介した通りである。その頃、ポカラのバイダムでホテル業を最初に創業したのは、三人のタカリ商人たち（既にチベット・インド間の塩貿易独占で得た資本を保有）と、そして英国・インドにグルカ兵の傭兵出稼者「ラフレ（Lafre）」の伝統を持つグルンであった。

そもそも「ディクール（Dikhur）」とは、タカリ族内部の「種耨」を融通しあう「頼母子講」の組織であったが、タカリが商人化する過程で、皆で資金を

融通しあう資金調達組織となった(飯島1980)。このタカリ族の伝統が、ポカラの観光産業化や貨幣市場化の波に乗って様々な「カースト(jat)」の人々で構成される汎カースト的私的金融組織となったのである。そうなるカースト境界を超えたビジネスマン達の事業経営の繋ぎ資金を調達する機関、しかも高リスクで高利子を稼ぐための私的投機組織へと変質するようにもなった。

筆者の1990年のポカラ調査では、ポカラ中に100を越すディクールがあり、投機的になりすぎて、4つが潰れたと聞いていた(山本1998:16)。1990年8月10日に、筆者は、自分の元リサーチ・アシスタントで、現在ポカラのチプレドゥンガで建築資材屋を経営しているマダブ・ゴートン氏が参加しているディクールの会合を参与観察させてもらったことがあった。会合はゴートン氏の商店近くの中庭で行われた。7人の様々なカーストの商売人が集まっており、彼らが出しよった資金(総額10ラック Rs = 約150万円)に対して、その資金を借りたいものが、名前と利率を紙に書いて、投票箱のようなものに入れ合った。ディクール長(取締役)が最後に投票後、その利子投票紙を取り出して、結果を発表する。一番高い利率を読み上げて、皆に「これでよいか?」と聞く。もしもっと高い利率を払ってでも金を借りたい人がいれば、再度の投票を請求する。このような投票を何回も繰り返し、利率が高すぎて借りる意志を放棄した人は、名前だけを書いて棄権投票をすればよい。二回の投票を繰り返し、三回目の投票後に議長が決定者の氏名と利率を発表すると、もう誰もが異議を出さずに、出席者全員の拍手で議長の決定者を正式の借用者として承認した。借金は一年以内に利子を付けて返済しなければならない。

現在のディクールは、ビジネスマンが銀行ローンなどを活用しながら資金繰りをしている際の「つなぎ資金」を確保する私的金融機関として結構重宝されている。筆者の古くからの友人のタカリのホテル・オーナーは、カトマンドゥやポカラで10くらいのディクールに入っている。彼にとっては、ディクールは投資対象というよりつなぎ資金を遣り繰りする施設なのである。しかし、何人かの人が借りた資金を返済せずに、潰れてしまったディクールは決して少なく

はない。私的な組織である限り個人的な相互信用しかディクールを結合させているものはないし、それだと、余りに高い投機的リスクと誰かの資金持ち逃げへの不信・疑惑が高まるばかりである。幾つかのディクールの破産・解散を経験して、それをもっと信頼でき安心できる投機機関にするためには「借款」を用意して公的な「銀行」として登録すればよい。それならば、メンバー各自が法的な拘束でもって相互に公的責任を守りあえる。後に、〈表3〉で多くの銀行の誕生年度を調べれば明瞭であるが、圧倒的に多いのは2000年前後、以降である。その頃既に存在していた多数のディクール群が銀行に棚上げされてしまったのであろう。

〈ポカラの経済的伝統(2)：グルン族のラフレ〉

「グルカ（英ネ）戦争」（1814～16年）は英国の大砲の勝利であったが、その終戦後に締結された「セゴール講和条約」（1816年）では、ネパールのグルカ兵の勇猛さを高く評価した英国がグルカ兵を傭兵として迎え入れる約束をした。それ以来、英国陸軍にグルカ連隊が出来て現在に至る。しかも、この契約は、インド独立後には、インドも仲間入りして三国協定になり、それ以来、グルン、マガール、ライ、リンブなどモンゴロイド系種族とともに、バフン、チェットリの非モンゴロイド種族までもが英連邦諸国へグルカ兵として出稼ぎにいく伝統が出来たのである。ポカラでは、グルカ兵に行くのは、グルンが他を圧倒しており、グルンの若者のエリートへの道となっている。確か、英国やインドへグルカ兵として出稼ぎに行ったグルン青年は、年金資格のつく11年間の兵役を終えると故郷に帰ってくる。その多くがポカラに家を建てて住み、潤沢な年金で老後を楽しむのである。だから「ブプ・ラフレ (*Bupu-lafre*)」（元グルカ兵）のグルンがポカラの最大の民族資本であることは間違いない。筆者は、ポカラ土地税務署の1978年から1982年までの土地売買による名義変更を拾ってカースト間の土地所有権の移動を調べたことがあるが、グルンがバフンやチェットリから1,300口パニーもの土地を買いあさっている事実を知った（山本、2009：2-4）。グルンには、ホテルが儲かると見れば一斉にホテル業を始めたり、銀行が

儲かれば一斉に銀行を作りだす傾向がある。だから彼らには「ベデエ (Bede)」(羊) というあだ名がある。先頭の羊が動く同じ方向に、他の羊も一斉に後を追いかけて進むからである。

〈マオイスト人民戦争からの資産家難民〉

巻末の銀行リストの〈表2-4〉などを参照すれば、2000年にポカラに銀行誕生のラッシュのピークが来ていたことを表している。これにはネパール国内政治上の理由がある。その頃は、マオイストの人民戦争の真っ盛りであり、ネパールの西部、東部ともに辺境の山岳地域は殆どがマオイスト勢力下に入ってしまった。マオイストはその地域で既に「自治政府」を形成していたのである。このマオイスト自治政府支配下に住んでいた大地主や大商人たちはマオイストの制裁や現金供出を恐れて、その当時まで国軍が治安を掌握していたカトマンドゥやポカラの大都市地域に逃げ込んできていた。彼らは持てるだけの現金や財宝を運びこんできて安全な都会で保管する必要が出てきていた。そうすれば、ポカラでは、金持ち避難民の金と元ラフレのグルンの年金貯蓄を合併すれば、小さい銀行なら幾つか作れる。合同銀行、合資共同組合は簡単にできそうである。こうして2000年以降のポカラは銀行・金融企業・融資組合のラッシュとなったことが考えられるのである。

〈ポカラ銀行業界の階層化と乱立過多〉

〈表2-1〉から〈表2-5〉までは、ネパール国立銀行 (Nepal Rastrya Bank) ポカラ支店で入手した現在ポカラに所在する全銀行のリストである。〈表2-3〉までの三表から一目瞭然なのは、これらの銀行群が三つのカテゴリーに階層化されていることである。この階層化は、資金力、営業範囲でレベル差があり、しかもその間には複雑な資金投資関係がある。〈表2-1〉の22の銀行は、「第一種 (1st category)」の「商業銀行 (commercial bank)」グループである。資本金力が最も豊かで (6千万 NRs. 以上)、ネパール全国で営業することが認められている。これらの商業銀行は、独自に女性マイクロファイナンス (FMF) は実施しないが、FMFを実施するより下位の銀行群や貯蓄投資企業に資本参加を

している。

〈表2-4〉は「貯蓄投資共同会社」で、幾つかの企業が金を出し合って作る合同金融会社である。これらの貯蓄投資共同会社は、その貯蓄利率が6～7%であり、融資利率は17～18%と法的に規定されている。この〈表2-4〉には31の貯蓄投資共同会社が列挙されているが、それら31社のうち28社（つまり90%）が、1999年から2001年の3年間に集中して設立されている。この異常な設立ラッシュの背景は何があったのかは、前節で筆者なりの解答をしめしたはずである。また、この〈表2-4〉に添付して、「このほかに19の貯蓄共同会社がボカラにはあったが、何らかの理由でそれらは閉鎖されてしまった」とある。

ボカラの銀行群の大半はまだ10年程度の歴史しかない若い銀行である。しかもかなり簡単・安易に創設されたものらしい。これまで19の潰れた銀行・金融会社はそれを雄弁に物語っている。資本金にしても、最大クラスが1,113万 Rs.（約1,670万円）の「アイディアル貯蓄投資共同会社」(#13)、627万 Rs.（約940万円）の「スベッチャ貯蓄投資共同会社」(#8) 程度のもので、銀行としてはささやかな資本金と言えるだろう。その活動範囲は殆どボカラ市内に限定され、その顧客対象の多くがボカラの貧困層なのである。

さらに〈表2-5〉には、「女性用貯蓄投資協同組合」が現在13組合ある。これらの組合は、基本的に〈表2-4〉の貯蓄投資共同会社とまったく同じで、これらの認められた利率は、貯蓄投資共同会社と全く同様、貯蓄利率が6～7%、融資利率は17～18%である。相違もある。第一は、これらは「組合」登録をしておき、「会社」登録はしていない。（この違いは、税金率が大きく異なると言われている。）

第二の相違は、これらは基本的に顧客を女性に限定しているが、前者はそうではない。ボカラ各地の女性自治組織である「母親会」(*Ama Samuha*) を対象として、彼女らの自主的な貯蓄・投資・運営に頼っているところがある。それだけに、経営には素人集団の弱みから潰れるものも少なくない。前項の「貯

蓄投資共同会社」も、31社の存続会社の他に、19社が閉鎖しているとの添付記述があったが、この「女性用貯蓄投資共同組合」にも、「その他に18組合が何らかの理由で閉鎖している」との特記がある。特別に留意してほしい。現存の組合が13であるのに対して、すでに閉鎖したものが18組合もある。この事実は、非常に脆弱で信頼性に欠ける金融機関だと言わなければなるまい。これら13組合の資金も、10ラック Rs. (約150万円) から6,200Rs. (約9,300円) と極めて微小である。これらの女性金融組合は各地の「母親会」が主体となり、国際的 NPO/NGO が資金的バックアップをするのが典型的な運営スタイルである。資金力が不足すれば、支援する外国 NPO や NGO が資金を追加してくれるので、組合幹部には経営健全化への甘えがあるように思える。彼らにとっては、定期的を送金されてくる先進諸国の資金を女性用貯蓄投資の福祉的目的に運用することが重要であり、組合自体の利潤を拡大する目的は自明化されていない感じがある。筆者がある一社に聞き取り調査に入った時、その組合の幹部にはダリット出身者の大学卒業者が多い事実がわかったし、また、彼らの主要な就業目的は月5千から6千 Rs の給料の確保が最大関心事で、事業を盛りたてることではないという印象であった。既に現存の13組合よりも多くの18組合が閉鎖されている事情は、ボカラの金融業界の競争の証左であり、それ故、素人的な経営の銀行・組合は経営不全で閉鎖に追い込まれたのであろう。

〈表2-6〉は、筆者が作成した表で、現在ボカラで活動している女性用マイクロファイナンス専用銀行の5行である。これらのうちウエスタン・ルーラル・デベロップメント銀行の開業が一番古い。この「WRDB (Western Rural Development Bank)」は、バングラデッシュからネパールに Gramin Bank が進出したのを機に、改名したものである。同銀行の合資資本金1.2億 Rs で、投資(ローン貸与)総額は6千万 Rs である。同銀行の合資資本構造は、以下の如し(括弧内は資本比率)。① HMG (ネパール政府：16.5%)、② Nepal Investment Bank (2.5%)、③ Nirdhan Utthan Bank (10%)、④ Himalayan Bank (25%)、⑤ Nepal Bank Ltd. (5%)、⑥ Nepal Rastra Bank (10%)、そして⑦ WRDB 顧

客会員（39.67％）となる。ネパール系の資本総額（①、②、③、④、⑤、⑥）が69％を構成している。

WRDB は、西ネパールに2000年に進出してきた。本部は Butwal にあり現在35支店ある。ポカラ支店は New Road、現在ポカラで41「センター」（チメキピカス銀行用語では「ユニット」）、260Group、1,800人の顧客がいる。ポカラの46スクンバシ集落群のうち、25群（〈図1〉上の#7、#8、#10～#23、#26、#29、#30～#34、#41、#43、#44）に顧客を持っている。特に#29（Rate Piro）には100人の顧客あり、スクンバシ全体で400顧客となる。ポカラ地域の返済率は99.3％である。ポカラ支店長の話では、ポカラの返済率はネパールで最高で、ネパール極西地区やタライ地区は最悪であると言う。

WRDB の FMF 運営方法はチメキピカス銀行のそれと殆ど同じである。（これは、後者が前者をモデルとしてのだから当然であろう。）FMF の顧客条件としては、①18歳から55歳までの女性で、②10年間、現在の住所と同様の固定した場所に居住していること。③その女性は、自分でサインが出来、自分で何か仕事を始めたいと考えていることが要求されている。5人組の構成は重要で、20～50人のメンバーが「センター（Centre）」に集約され、センター毎に「センター長（Centre-chief）」が置かれる。毎週センターで会合し、そこで週単位の返還分割支払いを集計記帳する。（ただし、チメキピカス銀行のやり方は、月一回に変更されている。）ローンは、最初は、1,000Rs～10,000Rs 単位の融資が何らかのビジネス立上者に行なわれ、それを完全返済すれば、二回目融資は1,000Rs～20,000Rs 単位で、三回目は1,000Rs～30,000Rs 単位、四回目は1,000Rs～40,000Rs 単位で以後繰り返される。何回か融資返済に成功した物は、“デポジット”をした上で、10万 Rs の融資が受けられる。20％の年利子率で、ダウンペイメント方式である。

ツツンガ地域においては、WRDB の FMF が先行していたが、現在では、後発のチメキピカス銀行の MFC に食われてしまっている。つまり、WRDB の FMF は一向に拡大しない。現在は、一つの5人組制度自体も割れてしまい、2人と

なっている。脱落者の一人アーナンディ・グルン（彼女はチメキビカス銀行 FMF の当地最初の顧客でもある）に言わせると、「WRDB のように集会が週一回もあるのは忙しすぎて困る。集会が月一回であるチメキビカス銀行の FMF の方が我々の生活のベース、相性に合っている。」

〈観光都市ポカラの金融業界の特徴〉

ポカラに所在する金融機関として、①「第一種銀行」にカテゴリズされる22商業銀行（表2-1）、②「第二種銀行」の15の開発銀行（表2-2）、③「第三種銀行」の12金融会社（表2-3）、④31の「貯蓄投資合資会社」（表2-4）、⑤13の「女性専用貯蓄投資組合」（表2-5）、⑥5つの「女性マイクロファイナンス専用銀行」、それに⑦（正確には、その総数さえ不明な）生まれては消え、また生まれる泡のようなディクール群がポカラの金融業界には活動している。実数としては、ディクールを含まなければ100近く、ディクールを含めば恐らく200近くになるだろう。これらの個々の金融機関間にはポカラの金融需要総体内での「棲み分け」が進んでいるだろうが、人口たかだか15万人くらいの観光都市には、いくら国際観光客がドルとルピーの為替交換をする必要があるからといっても銀行の数が多すぎる。

現在ポカラには、「リージョナル・ホテル・アソシエーション・ポカラ (Regional Hotel Association Pokhara)」と、「ポカラ・ホテル・アソシエーション (Pokhara Hotel Association)」との二つのホテル協会が並立している。その理由は、中規模以上のホテル群と弱小ロジ・ゲストハウス群との棲み分けにある。その経営上の相違から端を発して、1990年前半に、前者のホテル協会から、後者のホテル協会が分離独立している。その後、1999年をピークにポカラの国際観光客は減少して2004年には6万人代まで落ち込んでいる。

筆者の手元には、「リージョナル・ホテル・アソシエーション・ポカラ」事務所から頂戴した同協会メンバーのリストがある。そこには、ポカラ所在の中規模以上のホテルのリスト、15の「スター・ホテル (Star otel)」と65の「ノンスター・ホテル (Non-star Hotel)」が掲載されている。筆者はもう一つ「ポカ

ラ・ホテル・アソシエーション」事務局から貰った「ホテル・ロッジ・エンド・ゲストハウス・イン・ポカラ (Hotel Lodge And Guest Houses in Pokhara)」も持っている。これには大小様々な186のホテル、ロッジ、ゲストハウスが掲載されている。これら二つのホテル協会間には、所属メンバーの重複はない。従ってポカラには、両アソシエーションに所属する266のホテル、ロッジ、ゲストハウスが存在していることになる。実際には、どのホテル協会にも所属していない潜り営業のものが少なからずあると思われるから、おそらく実在数は300を超えるであろう。ポカラに来る外国人観光客数が年間6万人程度で低迷している現在、それら300を超えるホテル群は、目下熾烈な宿泊客争奪の競争を体験中なのである。

国際観光都市ポカラには、300近くのホテルがあり200近くの金融機関が存在する。それらが、国際観光客到来の低迷にも関わらず存続しているのは、伝統的なグルカ兵による「ラフレ (*rafre*)」の海外出稼ぎによるところが大きい。ポカラの銀行では、①観光産業・ホテルなどへの金融貸付け、②ネパール人の本国送金の手数料、③ポカラに滞在する国際観光客の外貨換金、④人々の貯蓄管理とローン業務などがある。観光産業の景気が低する限り①、③での収益は余り期待できない。②で収益を上げたいのだが、ネパール人の労働者を受け入れてくれる外国の経済状態に制約されて、これも望むような収益上昇が見られない。そうすれば、最後は、④に活路を切り開く必要があるだろう。つまり、人々に金を貸して、その利子収入で稼ぐという「マージン収益」こそがネパールの銀行が経営難に陥らずに存続するためには必要であろう。昨今の米国や日本では貧困な人々から金を巻き上げる「貧困ビジネス」(湯浅2008)の存在が注目されているが、このような金融業界の競争状況を考慮する際、ポカラの女性用マイクロファイナンス業務が貧困ビジネスにならない保証はまったくない。筆者がスクンバシの調査をしていた時に、定職もない彼らが、何の担保もないのに銀行から金を借りだしているのを見て、何とポカラの銀行は融資に甘いのかと感心したことがある。この「甘さ」への心配は、世界の金融王国アメリカで、

貧困者層を対象とした住宅サブプライム・ローンが大規模な焦げ付きで、大手投資会社さえ崩壊し、株も大暴落したのを鑑みて、ポカラの金融状況が心配になるのは当然であろう。

(3) ツツंगा地区の発展とチメキビカス銀行の進出：

ポカラ市街の中心地にあるオールド・バス・ターミナルからカトマンドゥーに至るプリティビ (*Prithivi*) 幹線道路を東に行くと、すぐに溪谷のような狭いセティ (*Seti*) 川に架かった「チャイニーズ・ブリッジ (*Chorsanghu*)」がある。それを越えてしばらく行くと、幹線道路を横切っているポカラへの歓迎ゲイトがある。そこから少しを右に折れて南に向かっていくと、ラム・バザール (*Ram Bazar*) があり、さらに南に進むと、右手に癩病院グリーン・パスチャー・ホスピタル (*Green Pasture Hospital*) を見ながら進むと、トリブバン大学フォレスト・キャンパス (*Forest Campus*) に行き当たる。このキャンパスをぐるりと迂回すると、その裏側 (南側) に、タンティ・パタン (*Tanti Patan*: #31) の元スクンバシ集落が伸びている。タンティ・パタンの北西には小高い木立に恵まれた「丘」があり、人々はこれを「フォレスト」とも呼んでいる。このフォレストとタンティ・パタンとを含んだ更に南側に広がる広大な原っぱの地域一帯は、ツツंगा (*Tutungga*) と呼ばれている。このタンティ・パタンのスクンバシ集落の住民たちは、かつてはスクンバシであったが1998年に「ラルプジャ (*lalpuja*: 土地所有証書)」を貰っており、現在は、隣接する普通のコミュニティとの融合が進んでいる最中であるが、人々は現在でもあえて「元スクンバシ」集落という呼びかけで語ることがある。

筆者がポカラ南郊にあるツツंगा地区を初めて訪れたのは非常に古い。筆者は1978年に初めて科研調査でポカラにおける「カースト通婚」の調査をしたが、その時に筆者の調査を助けてくれた調査助手にパーシラム・チェットリ氏がいたが、彼の家がツツंगाにあった。従って、筆者は、彼を通じてこの地域に

友人が多く出来たし、その後、パーシュラムがカトマンドゥに移住してからも、ポカラへ来るたびに筆者はツツガの友人宅を度々訪問するようにしていた。いわば、筆者のツツガ地区の人々とのラポールは、1978年以來の長い交際に支えられている。その当時のツツガは野原と畑が散在する過疎地帯で、その地に散在する半農の住民の殆どは、ラム・バザールにあるインド陸軍の「グルカ・ペンション・キャンプ」に定期的に年金を貰いにくる元グルカ兵がほとんどであった。

このツツガ地域の開発は、1982年にトリブバン大学のポカラ・フォレスト・キャンパスの建設が開始されて、1984年8月に開学したことから始まったと言えるだろう。それまでは、小高い丘とだだっ広い原っぱに、ところどころ農家が存在する程度の人気がないところであった。それが1982年にフォレスト・キャンパスの建設工事が始ると、ポカラ以外から駆り出された建設工事労働者の居住する仮宿が建設現場周辺の方々に出来るようになった。1990年の民主化運動以降は、ポカラでのスクンバシ集落成立の形成が最も大規模かつ迅速になされた頃であった。ポカラ市内のスクンバシ集落がほぼ満杯になると、その人口圧で押し出された人々が、タンティ・パタン（〈図1〉㊸ Thanti Patan）に押し掛けて新しいスクンバシ集落を形成した理由は、そこに既にフォレスト・キャンパス工事労働者の何人かが工事終了後もポカラに居残って暮らしをしていることがプル要因となったからである。

1990年2月11日の夜、土地の人々がタンティ・パタンと呼んでいたフォレスト・キャンパスの南東境のマンゴー林に約30人程度のグルン達が現れ、その土地を占拠した。この土地はポカラ市の所有地で、当地の公立高校（1957年設立の Shiddha High School）は、この土地を市から払い下げてもらい、それをいくつかの「ガレリ」（住宅地）に分割販売して、その売上資金を学校の教育設備に投資しようと考えていただけに、「先を越された」思いがしたようだった。ツツガの自治会幹部は、トリブバン大学 Forest Campus 当局に相談に行った。大学当局も、職員住宅が近くにある手前、泥棒などが増加する可能性を心配し

て、スクンバシを追い出すことを望んでいた。それで、自治会と大学キャンパス幹部とは一緒に、警察に行き、タンキ・パタンのマンゴー林を不法占拠したスクンバシたちを強制的に追い出してくれるように頼んでみた。しかし、その頃はスクンバシの不法占拠がボカラ中に起こっており、ボカラの市街地中心部のスクンバシ集落が大きな社会問題となっており、中心地から遠い郊外のスクンバシなどを警察は取り締まりの対象とはしなかったのである。

このように民主化以降、ツツガはだんだんと人家が増えてきたが、この地域が更に開発される契機となったのが、1992年に建設が始まりゆっくりと8年かけて完成して2000年にオープンした「ホテル・プルバリ (Hotel Purubari)」の誕生である。別稿(山本2009)で指摘しておいたが、ボカラの観光産業は、「ヒマラヤ登山期」(1950年代～1960年代)にゆっくりと始まったボカラへの外国人観光客の到来は、「トレッキング・ヒッピー期」(1970年代～1980年代前半)には年間6万人くらいまで急激に増加した。「マス・ツーリズム前半：低迷期」(1986～1999)には、外国人観光客は年間6万人台ラインで停滞するが「マス・ツーリズム後半：上昇期」(1995～1999)には一気にピーク時1999年には11万人まで上昇するが、その後はマオイストによる内乱の危険情報が世界に響いてすぐに「下降期」(2000年～2005年)となってしまう、再び6万人台までに落ち込んでしまっている。

1992年にネパール観光省は、それまでのネパール観光産業「マスター・プラン」を修正して、ネパールの観光産業の「質の向上」と「高級感」を付加しようとする決定をしていた。基本的にタイ資本によってホテル・プルバリがボカラのセティ川沿いの広い河岸段丘の上に建設用地を確定したのは、1992年であり、それ以降、8年かけて中世ネワール王朝の格式ある伝統建築と広大なプール付きのホテルが完成されたのは2000年であった。その場所は、ツツガから南西に徒歩10分の位置である。しかし、残念ながら、それが完成された頃、ボカラの観光産業は既に「下降期」に入っており、このホテルの経営は決して楽観できない。しかし、ツツガにとっては、このホテルの開業で仕事を確保で

きた者もあるし、ホテル・プルバリの従業員だからということで、ツツガに居住先を確保した者も何家族か出来ている。チメキビカス銀行 FMF がツツガに到来して第一ユニットを形成しはじめたのは、2003年の秋であった。

〈チメキビカス銀行の創立とポカラ進出〉

ネパール語で「チメキ・ビカス」とは「近隣発展」を意味する。「チメキビカス銀行」は、2002年にネパール人富豪ブワネソリ・パンタ (Vuwanesory Pantha) 会長と彼女の夫で、会長顧問でもあるタクール・ナート・パンタ博士 (Dr. Thakur Nath Pantha) によってマクワンプル (Makuwanpur) 地方ヘトウダ (Hetauda) で創立された。この銀行の株式全体は、1株1,000Rs (1,500円) の個人株が52%を占めており、その点から言えば、「銀行」と「合資会社」と「共同組合」の中間形態であるかもしれない。そのような個人株集合以外は4金融機関、Himalayan Bank (12%)、NBL Bank (12%)、Bank of Kathmandu (12%)、Chimeki Samaj Sansta (12%) がそれぞれ出資している。現在、ネパール政府は、



写2 チメキビカス銀行ポカラ支店

1990年の民主化以降、Nepal Restraya Bank（ネパール国立銀行）から貸付業務の認可を貰う全銀行に、その資本の5%を貧民のためのMicro-Finance業務に投資することを義務付けている。ポカラにネパール民主化の1990年以降、とりわけ1999年から2001年がラッシュ期であるが、たくさんの貯蓄投資企業や組合が誕生したのは、この政令に反応したことも一つの理由であろう。

注目しておきたいのは、「銀行間の資本構成」がある種の「利潤吸い上げ構造」を持っている事実である。その方法には、(1)「パリティ方式」（投資資金比率応分の平等な利潤配分方式）と(2)「インベストメント方式」（経営の如何に関わらず投資資金の利子分の配当方式）とがある。ネパール全国は20地方（Districts）に区分されて、銀行の営業地区は、その資本力の大きさに決定される。資本が1千万Rs.で1地方、3千万Rsで10地方、そして6千万Rsになると、ネパール全国で営業可能となる。従って、小さな銀行も営業成績を上げて資本増資を志せば、全国規模の銀行になれるし、そうなるうとして大いに利益拡大に励む動機に見舞われるのが、チメキビカス銀行のような新興銀行の本性なのではないだろうか。

〈チメキビカス銀行の営業実績〉

チメキビカス銀行はネパールで10地方（district）19支店（branch）があり、総従業員が150名である。19支店全部で、470グループ2,250人の顧客がある。同銀行は、2003年6月にカスキ（Kaski）地方レクナス（Leknath）に進出し、ポカラには2003年8月にツツンガ地区（元）スクンバシ集落タンティ・パタン（Thanti Pathan）に進出している。2004年8月にポカラ市内に支店を創設し、現在では、ポカラ市内の26スクンバシ集落に顧客を持っている。ポカラ支店の現支店長は33歳のビノード・ラヤマジャル氏（Binod Rayamajal：チェットリ）で、その下に4名職員がいる。チメキビカス銀行の本店があるヘトーダの街には、ネパール唯一の国立大学トリブバン大学（Tribuvan University）の「森林キャンパス（Forest Campus）」があったが、1987年に第二森林キャンパスをポカラのツツンガ近くに創設した。この第一と第二森林キャンパス間の交流を通

じて、チメキビカス銀行はポカラを知り、ポカラに営業を拡張するようになったのである。

チメキビカス銀行は FMF（平均年利子率20%）が主要業務であるが、バイオ・ガスやユニットハウス設置ローン（年利16%）もある。顧客獲得のために、銀行職員が現地を巡回し、「ユニット（Unit）」結成後には、月一度の頻度で集会を実施している。顧客となる条件は、基本的に既婚婦人で、小さくても自己家屋を保有し、その土地に3年以上の居住歴を持つことである。未婚婦人でも27歳以上で、上記の条件をクリアーしているならよい。

グラミン銀行と同様に、この銀行でも1ユニットは5グループから成り、1グループが5人から成る。グラミン銀行と若干違うのは、前者は週一回だが、本銀行ではユニット集会が月一度である。ツツンガ地区第一ユニット（#3925）の現ユニット・リーダーはカルパネ・カティワタ（MC23）である。リーダーは、集会の開始時に女性の能力開発の「スローガン」（後述）を提唱し、それに続いて全員が唱和する。リーダーは、グループ全体の貯蓄額・ローン分割返済の記録を載せた「集金記帳（Collection Sheet）」の管理を任されている。ユニット会員は、誰もが月5Rsの会費と30Rsの積立預金を強制される。集会への遅刻者は、罰金10Rsを支払う制度がある。（この罰金制度は、約束を守らないと皆に迷惑をかける Discipline を学習させるために設けられている。）融資は、1年単位の小額ビジネス立上げ資金で、初期融資が上限1万Rsまで、その完済後、2回目は1万5千Rs、3回目以上は4万Rsが可能となる。現在の返還率は100%で、ネパールでもポカラ地域は最高の返還率を誇る。ユニットの誰かが返済不能となれば、ユニット全体が共同責任を担う。ユニット会員は誰でも1株（share）1,000Rs出せばチメキビカス銀行の株主になれる。

FMFの利子の計算方式は、1万Rs.を借入した2ヶ月目から10ヶ月かけて毎月返済するように計算されている。一看すると、毎月借入元金の利子率10%のようだし、利子は10%だという説明は分かりやすいが、実際の年利は15.6%になる。第一回目の融資の完済実績に基づいて、二回目の融資が可能なるが、そ

れは15,000Rs で18ヶ月返済となる。月当り元金返済が830Rs、利子返済が83Rs になり、元利合計返済が913Rs となる。三回目の融資は、40,000Rs が可能となり、それを24ヶ月で返済する。

〈チメキ銀行 FMF 運営の特徴〉

「集金通帳」には、ユニット集会に巡回してくる銀行職員とユニット・リーダーのみが記入でき、ユニット・リーダーが保管している。一般会員は、自分の貯蓄額と分割返済額が記入されている「個人通帳 (Ledger)」しか持たされていない。「集金通帳」に記載されている語句には、以下のようなものがあり、これらを説明しながら、チメキビカス銀行の FMF の業務内容をより深く理解することが可能となる。

まず“MC (Member Code : 会員番号)”がある。前述した如く、1 Unit は 5 Groups、1 Group は 5 Member で構成され、“MC11”は「Group 1、会員ナンバー 1」を、“MC55”なら「Group 5、会員ナンバー 5」を意味する。“Unit Code”は、同銀行の FMF のユニットの通し番号。“Meeting Place”は、この FMF の会員が住む地域名であって、具体的には Tutunga である。その地域の定例場所で、月 1 回の集会が行われる。返済はユニット全体の共同責任とされるが、実際にはグループの誰かがローン分割返済を出来なければ、そのグループ全員が共同責任で返済し、返済不能となれば、そのグループ全員が次期ローンを借りられない。

この集金通帳は、月々の貯蓄額と月々のローン分割払い額とが同時に平行して記入される特徴がある点を理解することが重要である。最初の“Saving Details” (貯金項目) では、まず“UF” (Unit Fund) として、各メンバーから毎月の会費 5 Rs を強制的に徴収するが、それはユニット会員全体の基礎貯蓄金として残されていく。“MS (Monthly Saving)”は、各メンバーに毎月 30Rs 強制的に積立貯金をさせる。“OS (Optional Saving)”とは、会員が随意に小額のお金が出来た時の任意貯蓄であり、“PS (Personal Saving)”とは、会員がまとまった金が出来た時の任意貯蓄である。

次に、ローンの記録が続くが、ローンには“Normal Loan（通常ローン）”と“Discipline Loan（規律ローン）”の二種類がある。（この銀行の使用する“Discipline”という英語の役には苦勞するが、筆者の理解する限り、「一段高レベルの任意融資であり、それだけ厳格な規律が必要である」という認識に立っている。それゆえ「規律ローン」と訳しておいた。）通常ローン、規律ローンともに任意で、ユニット・メンバーになったからといって強制的に始めさせられるものではない。少なくとも2008年の時点では、このローンを始めるにあたっては、グループ集会において会員の承諾が必要であるという方式が始まっている。

“LH（Loan Heading）”とは、「ローン融資目的である起業ビジネスの内容」で、具体的には以下のようなものが列挙されている。“AF（Animal Farming）”とは、山羊、鶏、牛、水牛など飼育生産。“SB（Service Business）”とは、サービス製造販売業（菓子パン、茶店、食堂など）。“RS（Retail Shop）”は、小売業（小間物、生活用品、衣服靴スリッパ、化粧品、菓子スナック・即席ラーメン類、雑貨など）。“APB（Agricultural Production & Business）”とは、農作物販売業であり、“AP（Agricultural Production）”とは、農業物生産のみである。筆者の2007年2月の調査では、第一グループ25人のローン・ヘッド（帳簿上の融資起業名）と、実際の職業実践とはかなりの相違がある。ほぼ半数の会員がローンヘッド上の起業カテゴリーと実際の職業との間に乖離が見られた。つまり、ローンを借りるための名目的な起業をでっち上げておき、ローン資金は別の目的に使うことが普通に実施されていたのである。これは、銀行側がローンしてもらった後の結果を詮索していない証拠であり、銀行のローン管理の甘さを物語っている。それが、2008年8月の調査で、FMFのグループ集会に出席してみると、ローンの借入を決定する際に、誰が、どんな起業に、なんぼのローンを借りるかを明確にさせて、そのローン貸与判断を会員全体の判断に委ねているのを観察して、かの「ローンヘッド」上の職業と、実際の職業との一貫性を求める態度が伝わってきたように感じた。

面白いのは、“InsNo (Installment Number)”という分割払回数が明記されており、例えば、“9 @ 12” (12回分割払で9回完債)のように表記されている。それによって、今月の支払いが何回目、あと何回分の分割払いが必要かを一目瞭然に分るようにさせている。

〈チメスピカス銀行 FMF 運営の特徴〉

第一に、チメスピカス銀行のFMFの営業方針は、単にローン貸与と分割返済のやりとりだけでなく、同一の顧客に対して①会費 (Unit Fund) と、②積立貯金 (Personal Saving) とが強制的に徴収されるが、FMFの本命である③通常ローン (Normal Loan) と、④規律ローン (Discipline Loan) とは、任意 (その意思のあるものだけ) 徴収されることにある。この様に、4本の貯蓄投資取引が平行して同時決済的に進行していくことに注意したい。

第二に、FMFの利点は、あくまでも無担保で連帯責任者が不要であり、そして少額融資であるから一回当たりの返済額が余り負担にならないよう少額に設定されている点にある。それだけ気軽に一銭の金を持たない女性でも借りられるし、分割返済にもなんとか遣り繰りがつくのである。

第三に、ユニット単位の連帯責任と集団監視性のゆえに、回収率が100%となる。とりわけ近所に住む主婦連中がユニット仲間にいるのだから、返済不能者は、近隣共同体から自動的に「非難の視線」を浴びて生活しくくなる。だから必死で返済する点は徳川の封建時代の「五人組」の連帯責任制と変わらない。

(4) FMF 第二ユニット会の参与観察記録

チメスピカス銀行 FMF (女性マイクロファイナンス) のツツンガ地区の第二ユニットの定例集会が2008年8月28日に開催された。筆者は、前日に、第二ユニット・リーダーのパービットラ・タバ (チェットリ) さんの許可を得て、当日の定例会議に参加して会議の進行を観察させてもらう許可を貰っておいて、その集会を参与観察させてもらった。以下は、筆者の参与観察による記録であ

る。

定例集会の会場は、フォレスト・キャンパスの東南角にあるシッデシワール・シヴァ (Seddheshwar Shiva) 寺院領内の集会場を借りることになっていた。その寺院の集会場の建物の二階は、臨時の警官派出所となっていて銃を担いだ警官が一人駐在していた。これは2001年頃、当地にマオイストが跋扈していたので、それを取り締まるために警官が駐在するようになり、その慣行が現在も持続されていた。集会は10時に始まる予定だったので、私は現地調査助手のラジェンドラ・ギリ氏と一緒に、10時15分前に会場に到着した。驚いたことには、リーダーをはじめ会員の9割方が既に会場に集合しており、既におしゃべりの真っ最中だった。集会に遅刻すれば、罰金10Rs. を課す規則が功を奏してきたようである。

さらに驚いたのは、ユニット・リーダーはじめ会員全員が鮮やかな紫色のサリーを着ている。これは、一人当たり400Rs. の自腹を切って各自が購入したツツガ地区 FMF ユニット・メンバーの“制服”のようなものであり、皆が美しい紫のサリーを着て一同に会すると、晴着を着たお祭りムードが集会場に漂ってくる。そして、その華やいとお祭りムードに引き寄せられてメンバーの女性達が普段の日常生活では殆ど忘れていた「お化粧」をして、約束時間より速めに会場に到着したのであろう。そして5分前になると、最後のメンバーが到着して、全員集合となった。チメキビカス銀行からのツツガ地区 FMF ユニット担当の銀行員は、まだ到着をしていなかったが、リーダーのパービットラ・タパさんは、会場前方の議長テーブルに立って、皆に「ナマステ (Namaste)」の挨拶をした。その挨拶に続いて、彼女は、本日の特別ゲストとして日本から FMF の実態調査のためにボカラに来ている筆者を公式で紹介してくれた。それで、私は、ネパール語で「皆さんとこの集会場で再会出来てうれしいです。今日は、みなさん方の紫色のサリーに合わせて、私も同じ紫のポロシャツを着てきました。今後ともどうかよろしく！」と、皆に私のポロシャツを見せるポーズをとり、若干の笑いを勝ち取って、短い挨拶をしめた。以下は、この集

会の流れを時系列で取り上げて、まとめている。

〈10：00 開会の儀式〉

議長席には、ユニット・リーダーのタパが就き、開会を宣言した。次に彼女は、最年長会員のバレティ・ガウデル（チェトリ）に議長席に来るように言って、FMF ユニット・メンバーの「宣誓」をするように指名した。それでガウデルは議長席に着て、皆に尊敬のナマステの挨拶をし、そして宣誓役に就いた。まずリーダーのタパが、チメキピカス銀行のFMFユニットの「スローガン」全部を読み上げた。その後、議長役のガウデルがその一つ一つを読み上げ、それに続いて全員が同じスローガンを一々復唱した。以下のようなスローガンである。

- ① 我々は「近隣（チメキ）」に住む女性たちである。
- ② 我々は毎日一緒に働きます。
- ③ 我々は規律を守って一生懸命働きます。
- ④ 我々はローンをし、分割払いで返済します。



写3 ユニット2の会員集会

⑤ 以上は、全て我々の家族の暮らしの「向上（ビカス）」のために行います。

〈10：15 貯蓄バランスと分割払い状況の報告〉

丁度この頃、チメキビカス銀行ボカラ支店の銀行員ウツタブ・ジョシ（ネワール）氏が会場に到着して議長席の横に座った。その時を待って、リーダーのタパは、会員全員をひとりひとり呼び出して、先月集金した貯蓄額と分割払い額とを確認させ集金表にサインをさせた後、預かっていた各々の個人通帳を返却した。

〈10：30 先月開始の新ローン紹介〉

次に、先月から新規ローンを開始した三人の仲間を次々に議長席に一人ずつ呼び出して、彼女たちの口から全員にそのローンの内実を紹介させたのである。

- ① 最初にゴピカ・パンデ（バフン）さんが呼ばれて、彼女は20,000Rs.のローンで自宅の農地の拡充をしたと報告した。それを聞いて、皆が拍手でお祝いをした。
- ② 次に二人目のブワン・クマリ・バイラージ（チェットリ）さんが招かれて、彼女は初めてのローン10,000Rs.を借りて農地を開墾し、農業を開始することとした。拍手。
- ③ 最後にサンギタ・タパ（チェットリ）さんが10,000Rs.を借りて水牛を購入した。拍手。

〈10：40 新規ローンの申し込みの採決〉

リーダーが新規ローンを借りたいと願っている候補者三人を、ひとりひとり順番に呼び出して、その候補者は、そのローンでどのような仕事を計画しているのを説明させて、そのローンの申し込みを採択するかどうかの判断を会員全員の拍手に委ねたのである。

- ① まずジョカ・マガールニ（マガール）が、登壇して皆にナマステの挨拶をし、そして彼女は自分の小売店を拡充する目的で三回目のローンを35,000Rs.でお願いしたいと申し込んだ。すると、全員が拍手して、採択の意思表示をした。

- ② 次にカルパナ・ラナ（チェットリ）が、マガルニと同様に35,000Rs.の三回目のローンでこれまでの美容雑貨の小売店を拡充したいと説明した。全員の拍手で採択決定。
- ③ そして更に、シタ・タパ（チェットリ）が呼ばれ、同様に三回目のローンで35,000Rs. 借りて、トマトのビニール・ハウスの規模を拡充して、生産量を拡大したいと訴えた。皆は大きな拍手で、採択の意志を明示した。

〈10：50 新規ローンの契約手続きと証人〉

リーダーのタパさんはチメキビカス銀行員のジョシさんに教えてもらいながら、三人の新ローンの契約書作成の手続きをしていた。その席には、三人のローン契約者がそれぞれの家族メンバーを呼んで「保証人」としてのサインをした。

- ① ジョカ・マガルニの娘ツル・デヴィが議長席に来て、借用証書にサインした。
- ② カルパナ・ラナの娘カンチャン・ラナが来て、借用証書にサインした。



写4 リーダーを指図する銀行マン

- ③ 最後に、シタ・タパの娘が不在だったので、隣人のラジェンドラ・ギリ（筆者の現地調査助手）が急遽保証人となることになり、彼が借用証書にサインをした。

〈11：05 チメキビカス銀行員（ウッタブ・ジョシ）のスピーチ〉

遅れて集会に参加してきたチメキビカス銀行ポカラ支店のウッタブ・ジョシ氏とは筆者は初対面であった。2006年にポカラ支店を訪問し支店長に面接した時には、彼はまだポカラ支店員ではなかった。年齢30歳で、体の大きい美丈夫である。

- ① 全員への自己紹介。チメキビカス銀行のMFC経営の現状説明。ネパール全国で支店数が40。FMF顧客数は85,000人。ポカラ支店では、162ユニットで2,600人の顧客メンバーがいる。
- ② チメキビカス銀行は、その業績の優秀さで全国的に注目されている。チメキビカス銀行が今日あるのは、貴方がたのようなユニットの活動のお陰である。今後とも、このように責任をもってちゃんと集会が維持運営されることが重要である。
- ③ 銀行は、第二ユニット・リーダーのパビットラ・タパに月一度のグループ集会の開催を取り仕切ることにより200Rs.をお支払いしている。リーダーである彼女の手伝いをした者には50Rs.が支払われる。この集会を維持するためリーダーがどんなに重要であるかということをお忘れしないでほしい。
- ④ 銀行は皆様が今後もっとローンを借りてほしいと思っている。貴方がたのFMFユニットの評価は、93点である。もし評価95点を獲得するためには、ユニット全員（25名）がローンを借りること。95点を獲得すれば、銀行から表彰状が授与されるでしょう。

〈11：20 新システム導入通知と閉会〉

新システムでは、ユニット・リーダーのパビットラ・タパがユニット・メンバーの通帳に貯蓄バランスと分割支払い額とを記入することを許めている。タパがいい仕事ができるように、銀行員は出来る限り彼女を支援したい。この

後、全員に集会参加のお礼をいい、それに対して全員が拍手した。その後、閉会への言葉は殆ど無く、全員の拍手が自動解散の徴であったようだ。解散は、11:25であった。

〈ユニット集会の参与観察後の見解〉

① 制服としての「紫のサリー」:

ネパールには、制服が義務付けられているのは、私立学校のイングリッシュ・ボーディング・スクール（公立小中学校よりエリート校）くらいのもので、軍隊や警官以外の会社・官庁が制服を採用しているところはまったくない。そういう面から、このFMFユニットが制服のような紫のサリーを皆で来て集会に参加することは、会員の「集団アイデンティティ」を形成し強化するのに貢献している。しかも、日常的には化粧などをまったくしない「おかみさん連中」の彼女たちが、このFMFの会合の日だけは、紫のサリーを晴れ着感覚で着るのに併せて少々お化粧を楽しむ習慣は、彼女たちの日常性で、このMFC会合の日が特別な「晴れの日」としての感覚で捉えられていることを実証している。

② ユニット・リーダーの役割増大と権限強化:

筆者が始めてチメキビカス銀行のツツンガ地区のFMFユニット調査を開始した2006年8月頃とくらべると、FMFのユニット・リーダーの役割が非常に拡大されてきたという印象を得た。以前は、ユニット会員個別の貯蓄金や分割支払いを月一回のユニット集会で行われていたが、その会場で集金と会計処理を派遣された銀行員が中心となって、取り扱いをしていた。ユニット・リーダーは、その結果が集金表に記録されるのを見届け、集会の終了後に、その集金表を次回の集会まで保管しておくことが仕事であった。（その頃のリーダーは殆どただ働きであった。）それが、今回の集会で「ニュー・システム」として銀行員から紹介されているのは、集金事業は殆どがユニット・リーダーが集会以前に済ませおり、集会ではその会計処理・帳簿記載を銀行員の援助で実行するという。集金業務を銀行員からユニット・リーダー

へと役割権限の主役交替が見られた。また、これによってユニット・リーダーは集金の為に近隣の会員の家々を回らねばならないし、また、集金した金を銀行のポカラ支店まで届けなければならない。つまり、銀行員が本来やるべき業務をユニット・リーダーが FMF の女性の奉仕誠心と自立精神の基に、代行することが要求されている。たいへんな仕事量であろう。もちろん、ツツガ地区ユニットの第二ユニット・リーダーのパービットラ・タパさんは、旦那がしっかり稼いでいて自由時間がかなりある専業主婦で、魅力と能力のある婦人なので、この種のボランティア型のユニット・リーダーには最適であると思える。そのリーダーに月当たり200Rs. のリーダー報酬が銀行から与えられることとなった。この月200Rs という報酬がリーダーの仕事量と取るべき責任の大きさに比べて安すぎるのではないかという見方もあるが、リーダーが正式に銀行から報酬を与えられるシステムに移行したことは、重要な変更点であると考えられる。

③ チメキピカス銀行 MFC 業務の猛烈な拡大スピード：

少なくとも、筆者がチメキピカス銀行の MFC ツツガ地区ユニットの第一ユニットが形成されてから第三ユニットまで拡大発展するのに、2年間しかたっていない。チメキピカス銀行全体から見ても、2006年3月には、19支店で2,350メンバーであったのが、2008年8月には、85,000へと36倍もの増加をみせている。この拡大のスピードは脅威的といえよう。この驚異的拡大にもかかわらず、チメキピカス銀行ポカラ支店の正式銀行員の数はあまり増加していない。つまり、MFC メンバーの驚異的な増大によって当然増大するであろう銀行業務量を各地域のユニット・リーダー達に集金・記帳業務を代行させることによって、銀行員の増大を制限することが可能である。しかも、それによって、チメキピカス銀行の収益率はかなり増大しているのではなかろうか。ユニット・リーダーへの月報酬200Rs. など安いものであろう。

④ 定例集会での全員参加と情報公開の効用：

月一度ながら定期的実施される FMF のユニット集会は、メンバーに対

して多くの社会的効用がある。まず、同一の紫のサリーを着て集会に集まることで、近隣意識よりも強い仲間意識、同一 FMF ユニットの集団アイデンティティが強化されることは既に述べた次第である。それと同様に、特定の会員を選定して、ユニット・リーダーとして彼女は、日常的に FMF 集金会計処理を通じてリーダーシップを発揮しなければならないし、定例集会の時には会議の MC として際立ったリーダーシップを発揮せねばならない。こうして銀行が金銭的援助とその他の制度的援助を与えながら、一介の主婦を地域の主婦連合組織のリーダーとしての経験をつませる事が出来るのである。このリーダーシップ・トレーニングは、銀行が公式に実施している教育プログラムの中にもあり、各地域のリーダー達を集めて、二、三泊のリーダーズ合宿を定期的に行っている。そうして鍛えられたリーダーたちは、それぞれの地域のコミュニティ開発委員会や母親会など自治会組織の運営する役割を期待されるのだ。

集会の中でも、FMF のユニットの貯蓄やローンの内容に関して一切、リーダーによって読み上げ、会員全員に知らされるような制度になっている。さらに、新しい会員のローン申し込みも、どんなビジネスをどれくらいのローン額で始るのかを皆で聞き、皆で評価しあいながら、それに賛否を表明することが出来る。(実際に殆ど反対意見を表明することは、ないようだが。)このように見ていくと、FMF の定例集会は、ネパールの婦人たちにとって、数少ない楽しい「サロン」のようなもので、それに出席し、いろいろな決定過程に参画しながら、決定すること、ビジネスのやりかたを集団で勉強する機会を共有しているとも考えられるのである。このような FMF の参加経験が何年か続いて、その家庭の貧困が目立って緩和してくるなら、その婦人の家族内でのエンパワーメントは著しく向上することは難しくはない。そのような女性エンパワーメントを達成して自信を持った婦人たちの集団は、ツツガの自治組織としても活躍している。

〈FMF ユニット会員の急増の秘密〉

チメキビカス銀行の女性マイクロファイナンスの第一ユニットには、2003年6月頃に始まって、アーナンダやミナの仲間呼び込みの努力もあって、同年12月には5グループ25名全員がそろっている。そして2007年2月には、既に第二ユニットが結成されていた。さらに2008年3月には、この第二ユニットの5グループ25名全員が揃ったばかりでなく、さらに第三ユニットの結成が準備されており、同年9月には第三ユニットは、既に2グループ10名の会員が出来ていた。最新の2009年1月のポカラからのeメール情報によれば、第三ユニットはさらに第三から第五グループまでの会員拡充に成功したとのことであった。このツツガ地区はポカラ市の南郊外でまだまだ住宅地としての発展が望める牧歌的雰囲気に残る広い土地にも恵まれている。だから漸増的な人口増加が見込めるが、チメキビカス銀行 FMF の会員増加はかなり急進的である。

この FMF 会員の急速な増大は、チメキビカス銀行のポカラ支店の支店長始め若くて行動的な銀行マンの営業的活力のせいでもあろうが、それだけではない。恐らく日本の銀行もそうであろうが、ネパールの銀行は、前述したように、銀行資金の大きさが営業地区の広さが決められている。「銀行資本が1千万Rs.で1地方、3千万Rsで10地方での営業が認可され、この資本金が6千万Rsになると、ネパール全国で営業可能となる。従って、小さな銀行も営業成績を上げて資本を増資すれば、全国規模の銀行になる可能性にかけて、大いに利益収奪に励む動機に見舞われるのである。」(3.0.) 現在のチメキビカス銀行は、資本金が3千万Rs以上で6千万Rs以下であるから、資本金倍増ができれば、全国規模で営業できる第一種商業銀行になれる可能性がある。ポカラの若い支店長からはそのような後発の新興銀行なりの大志が聞きとれたのである。

(5) FMF 第一ユニット世帯群の貧困緩和達成度と発見事項：

グラミン銀行方式の FMF が、貧困女性のビジネス立ち上げ資金として経済

的自立を達成させ、彼女たちのエンパワーメントを実現させている報告は沢山ある。筆者は、ボカラのツツンガ地区においてチメキビカス銀行 FMF の第一ユニットから第三ユニットまでの全世帯の家計家産調査を継続中である。その調査結果は膨大で紙面の都合から、MF 第一ユニット会員28世帯のデータを〈表3〉に掲載してある。正式なユニット・メンバーは、25人の婦人世帯であるが、筆者の調査期間中に、会員を辞めさせられた者1人、会員を自主的に辞退した者2人が出て、それら3名の空きポストが直に新メンバー3人で埋められている。それ故、〈表3〉には、28名の世帯が列挙されている。〈表3〉の28FMF世帯の貧困緩和の達成度の評価結果は、4種類に分けられる。「UP」は、FMFがその世帯の貧困緩和に何らかの貢献をしていると認められるもの(8世帯)。「DN」は、何らかの理由で貧困緩和に失敗し下降傾向が認められる10世帯である。「Lf (Lafre)」は、夫(あるいは息子)が外国へ出稼ぎ(広義の「ラフレ」)経験者で、出稼ぎ先の給料で成功している7世帯。さらに、「?」は、家計が上昇か下降か現時点では判断不能のケースが3世帯分ある。

〈貧困緩和成功組 (Up : 8世帯)〉

- ① MC13 : 専業主婦。夫は大学職員で大学官舎に居住。酒飲まず。貯金のみ。
- ② MC21-1 : 山羊飼育ビジネス、夫はバス運転手で勤勉、かつ酒飲まず。
- ③ MC22 : 茶店経営。夫はローラー運転手で高給取り。夫婦ともに酒を飲まず。
- ④ MC23 : リーダー。大学職員。夫も大学職員で、車のブローカー。酒飲まず。金持ち。
- ⑤ MC25 : 農業主婦。夫も農業。酒のまず節約勤勉。貯蓄微増で借金なし。
- ⑥ MC43 : 妻雑貨・茶店経営。夫フルバリ・ホテル職員。酒飲まず。夫は複婚で先妻放棄。
- ⑦ MC44 : 妻酒密造販売。夫は大学職員ドライバー。夫は酒飲まず。勤勉。
- ⑧ MC53 : 雑貨美容品店。夫は中学校教員。夫婦とも酒飲まず。

〈貧困緩和失敗組（Dn：10世帯）〉

- ① MC11：この FMF ユニットの初代ユニット・リーダーであり、二年前糖尿病の夫が失明しかけ、カトマンドゥ入院の費用を個人的に借金した。その借金が膨張し目下数ラック Rs（約80万円）に。2008年1月の夫が死亡以来、別人のよう。
- ② MC12：筋肉労働と密造醸造酒売りで稼いでいる。夫は左官屋で金稼ぎはよいが過剰飲酒。妻は夫の出張中に娼婦をしている噂が絶えない。
- ③ MC14：MC11の義理母。密造酒醸造販売。夫は元インド・ラフレで恩給少々。だが夫婦共に過剰飲酒で、FMFローン月割返済を度々遅延。今年6月にユニット会員追放。
- ④ MC15：密造酒販売。夫はタクシー運転手で車も所有。しかし過剰飲酒で散財多し。
- ⑤ MC21：ダマイ女で夫はチェトリ。義母が認めぬ結婚で、ラフレの夫からの送金なし。自分で小売商をしていたが、今春から子供を祖母に預けてサウジアラビアに女中奉公。
- ⑥ MC24：筋肉賃労働のダマイ女。夫はダマイで大工。国内出稼ぎの夫の仕送りなし、音信不通。先で第二妻と複婚したらしい。
- ⑦ MC32：シェルパ女で茶店経営。夫はダマイで大工。国内出稼ぎで仕送りなし。出先で複婚して先妻には音信不通。
- ⑧ MC34：野菜売り。夫はチェトリで大工だが、マオイストで被爆怪我。UML政治家の保護あり、後にUML支持者となる。
- ⑨ MC45：グルン主婦。賃労働。夫グルン大工。妻は第二婚で、先夫を村に棄て、子供を連れ現在の夫と当地に逃げてきた。ローン返済に時々遅れて皆に迷惑をかけている。
- ⑩ MC55：山羊飼育。妻はかつて酒場酌婦。そこへ来ていた顧客が現在の夫。夫は大学職員で安い官舎生活。夫は複婚で、先妻と子供らは村に放棄。夫婦ともに酒を飲み、最近はその酒量の増加傾向が心配。

〈海外出稼ぎ組 (Lf: 7 世帯)〉

- ① MC14-1: 専業主婦。夫と義理弟の二人がドバイへ出稼ぎ。両者で月 2 万 Rs. 送金あり。
- ② MC31: チェットリ専業主婦。夫インド陸軍ラフレ。定期的送金あり。ローンは親戚のため。
- ③ MC33: チェットリ専業主婦。夫はダマイの大工だが、第二妻と駆け落ち。息子のダマイ妻との結婚を認めず。息子はドバイへ出稼ぎに行き、定期的送金あり。妻にはやらず。
- ④ MC41: ギリ専業主婦。夫はグルンのホテルマン。カタールへ出稼ぎ。既に出国時の個人的借金返済。土地も家も確保。FMF ローンは本人には不必要だが、叔母 (MC42) の「肩代わりローン」をしてやっていることは、MC41 ~ 45 全員が承知。
- ⑤ MC42: ギリ (MC41 叔母) 雑貨店経営。夫はホテル・プルバリの庭師。四年前に家新築、二年前に長男がドバイへ出稼ぎに行くのに金が必要になり、姪の MC41 から肩代わりローンをしてもらった。長男のドバイからの送金が月 1 万 Rs くらいになり、借金完済。
- ⑥ MC52: カミ主婦。農業。義父はポット: メーカー。夫は 5 年前からドバイへ出稼ぎ。毎月 8 千 Rs を送金してくる。ローンは不要で、月掛けの貯金をするのみ。
- ⑦ MC54: ギリで最古のメンバー。雑貨商店。夫は選挙で膨大な個人的借金をしたが、日本での三年間の不法滞在労働で、その借金の殆どを完済した。

〈判定不能組 (? : 3 世帯)〉

- ① MC35: ダマイ女。野菜生産。夫はダマイで左官。夫は過剰飲酒。しかし二人の息子は勤勉で酒を飲まず。彼らの稼ぎが父の過剰飲酒を許している。上昇下降限界状況。夫は元マオイスト。
- ② MC51: 夫は借金してドバイへ出稼ぎにいったが、その借金を返済しきれず。再び今度は妻と共に、再度借金して、子供を親戚に託してドバイへ出

稼ぎに行った。FMF 退会。夫はドバイのホテル職員。夫の酒量が酒のドバイ行きで増えているのが心配。

- ③ MC51-1：バフン女性でチトワンからの出戻り夫婦。最近 FMF に入会。タライの農地から米を送ってくるし、夫が夫ボーディング・スクール教師で生活には困らない。しかし、タライの農地を購入した時に個人的借金（1 ラック、年利24%）と政府銀行ローン（3 ラック、年利11%）があるので、その支払は大変。夫の月給の伸びはないし、妻の起業と遣り繰りを工夫しないと、また過去のように借金を膨らませて土地を売却することにもなりかねない。だから、貧困緩和の将来性は成功とも失敗とも判断が難しい。判定不能。

〈貧困緩和判定調査の発見点〉

- ① FMF によるビジネス立ち上げで貧困緩和に成功していると判断できる 8 世帯に共通する点は、全て、夫婦ともに真面目、勤勉で、飲酒などの贅沢をしない夫婦である。しかも、妻の収入に依存することなく、夫に定職、定期的収入があることが必須要件である。
- ② 逆に、FMF のローンに助けられながらも、貧困緩和に成功するどころか、家計内容が下降していく世帯が10例も認められた。この失敗の最大の原因は、無責任な男性中心主義の夫たちに帰せられる。せっかく高級を稼げる腕（ドライバー、大工、左官）を持ちながら、己の稼ぐ力を過信して過剰飲酒に陥ってしまい、余剰金をみんな過剰飲酒に使いこんでしまう。ダマイのように技術力を持つ大工や左官は、出稼ぎに出ることが多い。出稼先で女と出会い、新所帯を持って古い女房を忘れ去るのである。
- ③ この地域の人々にドバイ、サウジアラビア、カタールなど石油マネーで潤っているアラブ諸国へ出稼ぎに行く人が沢山出てきている。これは、ボカラに古くからあるグルン族の「ラフレ」による海外出稼ぎの伝統がボカラの市民レベルにまで広がったのだろう。ボカラの貧困層は、容易に借金をする。そして借金が膨張し首がまわらなくなったら、海外へ脱出して「ラフレ」で

もして借金を清算しようと安易に考える癖がある。これは、ポカラの過剰な銀行の実体と関係があるだろう。

(6) 結論と今後の課題：

〈貧困脱出要件としての「プロテスタント倫理」の機能的等価物〉

我々の調査結果の重要な結論の一つは、FMF ローンによる貧困緩和の成功事例が存立する前提条件の存在である。マックス・ウェーバーの『プロテスタント倫理と資本主義の精神』から「宗教的・神学的意味を脱色させた禁欲と勤勉の倫理」、(したがって筆者は「プロテスタント倫理の機能的等価物」と呼ぶ)の必要性を挙げておきたい。この点は、筆者が前稿(山本、1998)でも強調したのだが、発展途上諸国の貧困層が貧困を脱出するためには、まず「禁欲と勤勉の倫理」が不可欠の必要条件となる。それには、ウェーバーが指摘する「神の予定説」とか「信仰表明」などキリスト教的意味付与は不必要で、純粋に自己の欲望を節制し、勤勉に労働するという最も原初的な「禁欲勤勉」の倫理が必要なのである。

今回の FMF 会員調査でも、FMF ローンを受けている家族が勤勉でまじめな性格をもっており、夫婦とりわけ亭主だけは必ず酒飲みでないことが制限条件として加味されるべきだろう。発展途上国では、食べ物に比較して酒類の価格が相対的に高いものとなる。ポカラでもそうであるが、一人前の食事代と、軽く酔いが回るほどの量のロキシー(四国稗の発酵酒)とは、市場価格で大体等価である。我々の発見したデータでは、ある程度腕のよい稼ぐ力のある運転手、建築労働者、兵隊あがり、稼ぎもよいが、酒も飲む。そして金があれば飲むことに使ってしまう、後日の必要性に備えた貯金を心がけないのである。

〈観光都市のマージン・エコノミーと貧困層の経済格差増大〉

ポカラにはグルンの人々の「ラフレ(Lafre)」の伝統がある。このラフレによりポカラ経済が潤い、観光産業も発展した。しかし、ポカラから海外へ出稼

ぎに行くのは、今やグルカ兵だけではない。インドでは、ネパール人は「グルカリ (Gurukhari)」と呼ばれており、兵隊だけでなく門番や守衛としても実直で信頼に足ると評判が高い。だからボンベイでもカルカッタでもたくさんのグルカリが門番や守衛として一般企業で働いている。

現在ポカラではラフレや「ブプ・ラフレ (*Bupu-lefre*)」(元海外出稼ぎ者)の人口がかなり大勢いる。これらブプ・ラフレの大半は、外国(旧大英帝国傘下諸国)の年金受領資格を貰って帰国した小金持ちである。彼らは、ポカラでビジネスを始めるか、豪華な借家を立てて外国人相手の大家暮らしをするか、または金貸し業になる。経営者となるためには、資金力と同時に、綿密な構想力と勇気ある実行力、ストレスに強い精神力が必要であり、それを兼ね備える者は決して多くはない。それに比べて金貸し業が一番楽である。逃げられない用心さえすれば、人に頭を下げて金を借りてもらわなくても、ストレス最小の商売である。だから小金持ちのブプ・ラフレは、金貸し業やディクールを渡り歩いて「マージン (margin)」(利鞘)を稼ぐのに忙しい。少し前に述べたが、ポカラの人々は、一人一人が多重債務者であり、同時に多重債権者でもある。これはポカラのエコノミーが観光産業とマージン・エコノミーとで持ちこたえているからではなかろうか。ポカラの人々が安易に借金をし、容易に金を貸す金銭感覚を植え込んでしまったのは、大勢のブプ・ラフレが作り上げてしまったポカラの負の伝統であろう。

最初に述べたが、「ポカラの観光産業化がその一般庶民に与えた影響は、決して潤沢な就職先の提供ではなかった。それよりも国際市場に組み込まれた市民の消費生活の高騰であった。」その結果、ポカラの庶民の多くが借金に苦しんでいる。そして彼らの多重債務と多重債権とのバランスが崩れてしまった時、彼らはきまって「ラフレに行って、借金を清算しよう」という発想をするのである。もちろん慣れぬ異国へ行って、慣れぬ生活環境で見知らぬ主人の命令で働くことはストレスの高い、寂しい生き方だと思うのは当然であるが、その嫌がる心境に鞭を打ち勇気づけてくれるのは、自分の直接知った近隣の人々

が、本当に外国へ出稼ぎに行き、かなりの大金を持ち帰ってきては借金を清算し、新たな土地や家を購入して資産形成をした実話である。そんな話の「デモンストレーション効果」で金に困ったボカラの若年・中年労働者は、ラフレへの道を目指そうとする。そして、ボカラに家族とともに留まって地道に働いて借金を返す正攻法を捨て去り、今やボカラで花盛りの（2008年夏に既に10社を下らない）人材派遣会社に並び、渡航費用・ビザ手続き費用一切を紹介先の外国企業で働いた給料から天引きされる（もちろん高い利率が計算されている）約束で、就労契約にサインをする。ラフレの伝統は、借金をFMFなどの地道な手段で返済を試みるレベルを飛び越して、外国へ飛んで華々しく稼いで一気に借金返済と資産形成を実現しようとする外国の豊かな社会への憧憬を生み残したのではなかろうか。

〈集会サロン化と主婦達のナイーブさ〉

筆者が驚いたのは、2007年に始められた「年金積立口座」が2008年8月には、会員の半数近くが加入している事実である。月当たり30Rs.のペンション積立金を継続して支払えば、10年後には月100Rs.のペンションが貰えるようになる。この話を信じて、瞬く間に会員の半数近くがそれに入ったのである。10年先にこのチメキビカス銀行が潰れて存続していない可能性などは誰一人もまったく疑っていない。しかしながら、本稿の最初の部分でも触れたように、既にボカラでは小さな銀行、貯蓄投資会社・組合などが10指で足りない程度に潰れており、リクルールなどは泡の如く誕生と消滅の繰り返しをしていることを彼女たちは知らない。

そのような正確な、客観的な、不愉快な情報を銀行マンに教えてくれることを期待するのは無理であろう。銀行マンは、①ユニット・リーダーの業務をアルバイト化させて報酬を与える一方で、ユニットの集金効率を上げること、②毎月一度の「ユニット集会」を煌びやかで楽しいサロンの行事に祭り上げることが最大の関心のようなのである。彼女たちに美しい紫のサリーで着飾らせ、皆がどんどんローンを増やして皆が豊かになる夢を与え、集会ごとに仲間内で発

表させあい、その楽しいサロンの行事を積み重ねる中で、担当の銀行マンがカリスマ化されていく。亭主より若くて、知的に洗練され、性的魅力が少しでもあれば、そして話が上手ならばまったく申し分ない。この銀行マンの好ましい「イメージ」が少しでも彼女たちの周りに根を蔓延らすと、主婦たちはお互いに勝手に、そのイメージを「神格化」させていくであろう。

参考文献

岡本真理子・栗野晴子・吉田秀美（編著）

2004年 『マイクロファイナンス読本：途上国の貧困緩和と小規模金融』 明石書店。
坪井ひろみ

2006年 『グラミン銀行を知っていますか』、東洋経済新報社。

山本勇次

2000 『スラム地区住民の適応に関する比較研究』 [平成10年度～平成11年度科学研究費補助金：基盤研究(A)2]研究課題番号（国）10041041] 研究成果報告書。

2001 「ネパールの民主化と都市スクンバシ集落の“コミュニティ”的特徴」、『立命館大学人文科学研究紀要』 No.76、199-246頁。

2006 「第一章：ネパール・ポカラ市のスラム集落発達と自生的リーダーの機能と限界：マオイスト撤退とスクンバシ集落自治組織のジェンダー的転換」、江口信清（編著）『スラム地区住民の自生的リーダーシップに関する地域間比較研究』 [平成15年度～平成17年度科学研究費補助金：基盤研究(A)2]課題番号15252004] 研究成果報告書、2-56頁。

2008 「ネパールカースト社会における観光産業と社会的弱者：観光都市ポカラの発展と少数民族タカリの健闘」、『立命館大学人文科学研究紀要』、No.91、99-170頁。

2009 「観光立国ネパールの観光産業の脆弱さ：雨季、内乱、資本不足」、江口信清・藤巻正巳（共編）、『観光』

Yamamoto, Yuji

2007 “Sukumbasi Transformation from Communitas to Community:”, in H. Ishii, D. Gellner, K. Nawa (eds.), *Social Dynamics in Northern South Asia Vol.1: Political and Social Transformations in North India and Nepal*, pp.122-169, Manohar: New Delhi.

湯浅 誠

2008年 『反貧困—「すべり台社会」からの脱出』、岩波新書。

（山本 勇次、大阪国際大学法政経学部教授）

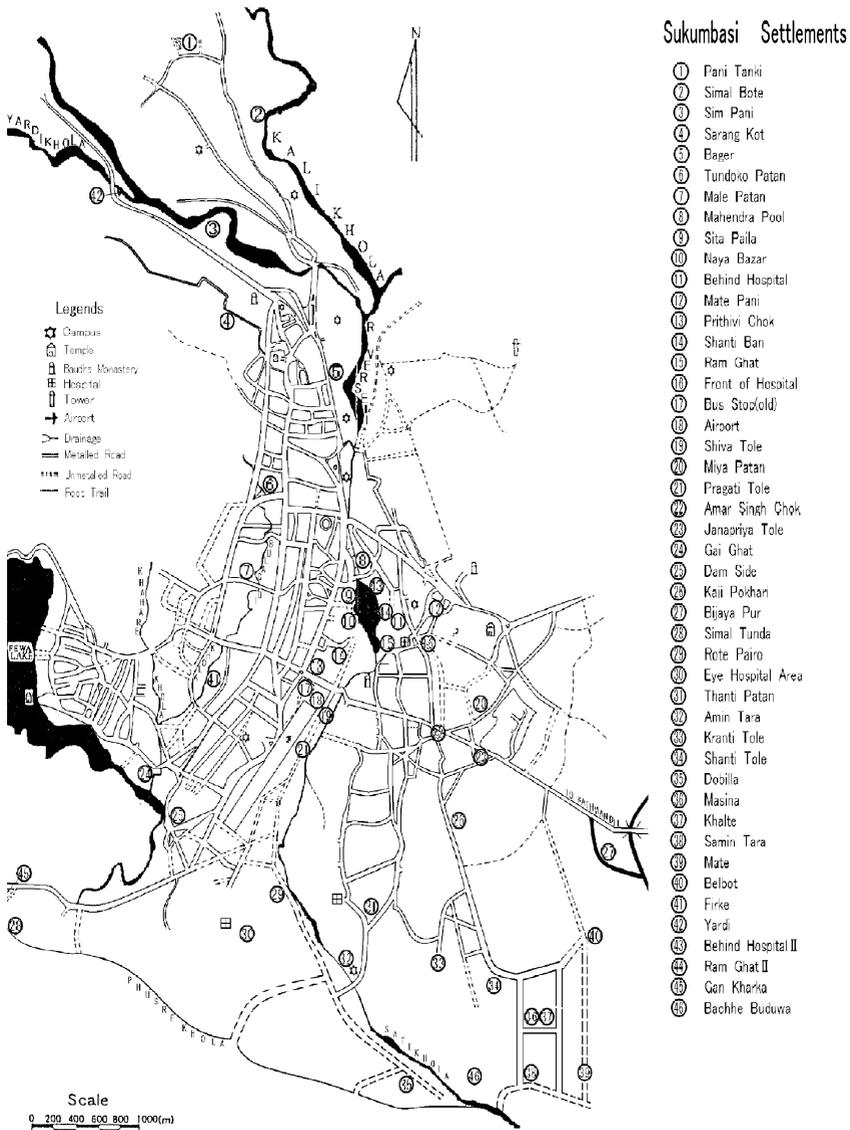


図1 ポカラ市内のスクンバシ集落の分散図

表1 ボカラ観光産業発達とスクンバシ集落増殖運動

	年	ボカラ観光産業発達の関連史	スクンバシ集落群の発生史
黎明期	1950	仏隊アンナブルナI峰初登頂	「スクンバシ集落番号」(#)は(図1)と同じ。
	1951	王政復古、ネパール開国	
	1952	ボカラ空港開設	
	1953	英国エベレスト初登頂・英国女王戴冠	
	1959	チベットのダライラマ14世、インドへ亡命	
	1969	シッダルト幹線道路開通(ボカラバイラフ)	
勃興期	1972	ビレンドラ王即位、ネパール・ツーリズム基本計画	#17 最初のスクンバシ集落誕生
	1973	ブリティビ幹線道路開通(ボカラカトマンドゥ)	
	1975	ボカラの都市化急成長	
	1977	ボカラ北東近郊3村の山崩れに難民村	
	1978	山崩れ3村の被害者に難民村建設	
	1979	反政府運動激化	
	1980	リファレンダム(国民投票)	
	1981		
	1982		
低迷期	1988		#35
	1989	反政府運動激化	#15、#34
	1990	2月デモ、11月新憲法発布:民主化運動	#2、#16、#21、#22、#26、#27、#31、#33
	1991	新憲法国政選挙。全国的ビジネス・ラッシュ発生。	#14
	1992		#32
上昇期	1996	マオイスト「人民戦争」(1996年2月)開始	#4、#18、#25B、#30 #25Bのスクンバシ集落を民間人が強制撤去 マオイスト支持スクンバシ集落 #42、#43、#44 誕生 マオイスト支持スクンバシ集落 #45、#46 誕生
	1997		
	1998		
	1999	マオイストのボカラ進出激しくなる。	
下降期	2001	王宮惨殺事件(6月)、ギャネンドラ国王即位 第一次国家非常事態宣言(11月)	#24、#42、#43、#44、#45、#46(マオイスト支持スクンバシ集落)を全部強制撤去 #46跡地にゴミ処理場完成、#47発見、 #48誕生(#19移転)、#49発見、#50誕生
	2002	国王独裁化 → 議会政治空転	
	2005		
	2006		
	2008	制憲議会選挙でマオイスト圧勝(4月) マオイスト主導ネパール共和国樹立(9月)	

表 2-1 ポカラの商業銀行 (Commercial Bank) : 1st category Bank (2008年 9 月)

No	商業銀行の名称	設立年	授権資本* (100万 Rs.)	払込済資本金** (100万 Rs.)
1	Nepal Bank Ltd. (NBL)	1985	1000.00	380.00
2	Rashtriya Banijya Bank Ltd. (RBBL)	1977	CM	CM
3	Nabil Bank Ltd. (NABIL)	1997	500.00	492.00
4	Standard Chartered Bank Nepal Ltd.	1991	1000.00	375.00
5	Nepal Investment Bank. Ltd. (NIBL)	2003	1000.00	587.74
6	Machhapuchhre Bank Ltd. (MBL)	2000	1000.00	550.00
7	Bank of Katmandu Ltd. (BOKL)	2003	1000.00	464.00
8	Everest Bank Ltd. (EBL)	2005	600.00	455.00
9	Nepal Credit and Commerce Bank Ltd.	2004	1000.00	692-50
10	Laxmi Bank Ltd. (LXBL)	2004	1000.00	609.84
11	Nepal Bangladesh Bank Ltd. (NBBL)	2001	1500.00	719.85
12	Himalayan Bank Ltd. (HBL)	2004	1000.00	643.00
13	Kumari Bank Ltd. (KBL)	2005	1000.00	500.00
14	Nepal SBI Bank Ltd. (NSBIL)	1997	1000.00	431.87
15	Agriculture Development Bank Ltd. (ADBL)	1985	(CM: Centrally managed)	(CM: Centrally managed)
16	Business Development and Financial Intuition Ltd. (BDFIL)	2005	60.00	20.00
17	Pokhara Finance Ltd. (PFL)	1996	80.00	20.00
18	Om Finance Ltd. (OFL)	1996	40.00	20.00
19	Union Finance Ltd. (UFL)	2005		
22	Mount Everest Development Financial institution Ltd. (MEDFIL)	2004	10.00	2-50

注* 「授権資本」: 「株式会社の定款に定める発行予定株式総数のこと」

設立時に一定数以上の株式を発行し、設立後に適時残りの株式を発行することが可能。

注** 「(払込済) 資本金」: 「株式が発行され、実際に払い込まれた資本金」のこと。

表 2-2 ポカラの Development Bank (開発銀行) : 2nd Category Bank

No	開発銀行の名称	所在地	電話番号
1	Nepal Development Bank Ltd.	Sabha Griha Chowck	061-520416
2	Gandaki Development Bank Ltd.	New Road	061-541244
3	Gandaki Development Bank Ltd.	Arghau	061-561644
4	Business Development Bank Ltd.	New Road	061-540725
5	Business Development Bank Ltd.	Pardi, Birauta	061-560185
6	Himchuli Development Bank Ltd.	Mahendrapul	061-542300
7	Sangrilla Development Bank Ltd.	New Road	061-538390
8	City Development Bank Ltd.	Chipledhunga	061-521505
9	World Development Bank Ltd.	Chipledhunga	061-528001
10	Kamana Development Bank Ltd.	Danda Ko Nak	061-560300
11	Development Credit Bank Ltd.	New Road	061-525252
12	Muktinath Development Bank Ltd.	Nagdhunga	061-520475
13	Nepal Industrial Development Nigam	Prithvi chowck	061-520083
14	Gorkha Development Bank Ltd.	New Road	
15	Garima Development Bank Ltd.	SabhaGrihaChowck	

表 2-3 ポカラの金融会社 (Finance Company) : 3rd category Bank

No	金融会社の名称	所在地	電話番号
1	Annapurna Finance Co.Ltd.	Chipledhunga	061-522671
2	Pokhara Finance Co.Ltd.	Gairapatan	061-524942
3	OhmFinance Co.Ltd.	Newroad	061-532600
4	Fewa Finance Co.Ltd.	Chipledhunga	061-538400
5	Api Financial Institute Co.Ltd.	Talchowck	061-561667
6	Kaski Finance Co.Ltd.	Newroad	061-523011
7	Elpic Everest Finance Co.Ltd.	Newroad	061-530960
8	Union Finance Co. Ltd.,	Newroad	061-550132
9	Nepal Share Markets And Finance Co. Ltd.	Mahendrapul	061-530581
10	Kist Finance Co.Ltd.	Sabha Griha Chowck	061-522340
11	Prabhu Finance Co.Ltd.	Newroad	061-539812
12	Butwal Finance Co.Ltd.	Newroad	061-522033

表 2-4 「ボカラの貯蓄投資合資会社」
(Saving and investment co-operative society ltd.) (2008年 9 月)

No.	貯蓄投資合資会社の名称	所在地	創立年	資本金
1	Public service saving and investment co-operative ltd	Purnchour Pokhra-9	1993	246,900.00
2	Public beneficial s. & in. co-op. ltd.	Lamachour Pokhara-5	1994	482,900.00
3	Everest co-op. society ltd.	Pokhara-4	1999	4,726,000.00
4	Fishtail multipurpose co-op. society ltd	Pokhara-4	1999	22-600.00
5	Mahalaxmi economical co-op. society ltd	Pokhara-5	1999	200,000.00
6	Bindavashini saving and investment co-operative ltd	Pokhara-4	2000	62,000.00
7	Dhaulagiri saving and investment co-operative ltd	Pokhara-9	2000	474,300.00
8	Suvechha saving and investment co-operative ltd	Pokhara-9	2000	6277860.00
9	Shikhar saving and investment co-operative ltd	Pokhara-11	2000	80000.00
10	Sunshine saving and investment co-operative ltd	Pokhara-9	2000	3403000.00
11	Sanchaya saving and investment co-operative ltd	Pokhara-8	2000	2540000.00
12	Phulbari saving and investment co-operative ltd	Pokhara-8	2000	523400.00
13	Ideal saving and investment co-operative ltd	Prithivi chock	2000	11133500.00
14	One world one future saving and investment co-operative ltd	Pokhara-8	2000	1261000.00
15	Barahee saving and investment co-operative ltd	Pokhara-17	2000	407000.00
16	Nation server saving and investment co-operative ltd	Pokhara-9	2000	387000.00
17	Shree rhododendron saving and investment co-operative ltd	Pokhara-4	2000	279700.00
18	Cone social saving and investment co-operative ltd	Pokhara-8	2000	932300.00
19	Fewa saving and investment co-operative ltd	Pokhara-11	2000	43,700.00
20	Our's multipurpose saving and investment co-operative ltd	Pokhara-9	2000	18000.00
21	Siddhi vinayak saving and investment co-operative ltd	Pokhara-9	2001	1500000.00
22	Conscious saving and investment co-operative ltd	Pokhara-6	2001	3199600.00
23	Bharat pokhari saving and investment co-operative ltd	Bharatpokhari pokhara-3	2000	89800.00
24	Siddartha saving and investment co-operative ltd	Pokhara-12	2000	625000.00
25	Wide saving and investment co-operative ltd	Pokhara-4	2000	2068000.00
26	Koushik saving and investment co-operative ltd	Pokhara	2000	379000.00
27	Educational society saving and investment co-operative ltd	Pokhara-4	2000	343100.00

28	Gracious saving and investment co-operative ltd	Pokhara-8	2001	1933000.00
29	Pokhara saving and investment co-operative ltd	Pokhara-9	2001	252000.00
30	Pokhara royal saving and investment co-operative ltd	Pokhara-11	2002	3783000.00
31	Small farmer saving and investment co-operative ltd	Sarangkot	2004	2800

表 2-5 ポカラの女性用貯蓄投資共同組合
(Women saving and investment co-operatives) (2008年9月)

No	貯蓄投資共同組合の名称	所在地	創業年	自己資本
1	Women multipurpose saving and investment co-operatives	Lamachour, pokhara-5	1994	6200.00
2	Akala devi women saving and investment co-operatives	Pokhara-6	1996	12500.00
3	Manakamana saving and investment co-operatives	pokhara-1	1998	11900.00
4	Active saving and investment co-operatives	Pokhara-5	2000	56000.00
5	Public conscious saving and investment co-operatives	Pokhara-8	2000	88000.00
6	Effective saving and investment co-operatives	Bhadauretamagi, pokhara-4	2001	444327.00
7	Mahakali saving and investment co-operatives	Bharatpokhari-3	2001	9300.00
8	Long lasting investment co-operatives	Dhikurpokhari-4	2001	83500.00
9	Pokhara commercial saving and investment co-operatives	Pokhara-1	2002	9900.00
10	Creation saving and investment co-operatives	Pokhara-8	2002	1001000.00
11	Chandikalika saving and investment co-operatives	Pokhara-18	2002	6400.00
12	Nava Siddhartha saving and investment co-operatives	Pokhara-8	2002	56000.00
13	Siddhivinayak saving and investment co-operatives	Pokhara-4	2002	121500.00

表 2-6 ポカラの FMF (Female Micro Crdit) 専用銀行 (2008年9月)

No.	Name Of The Banks	Address	Phone No.
1	Western Rural Development Bank Ltd.	Hyangja, Bagar, Newroa, Lekhnat	061-532805 061-528572
2	Small Farmer Bank Ltd.	Prithvi chowck	061-539413
3	Chhimek Bikas Bank Ltd.	Simalchaur	061-521468
4	Deprox Bikas Bank Ltd.	Indra chowck	061-432027
5	Nesdo Nepal Bank Ltd.	Chipledhunga	
6	Nirdhan Uttan Bank Ltd.	Ram Bazar	

表3 「ボカラ市ツツンガでのFMCユニット資産形成調査総括」(2008年9月現在)

MC、スクンバシ	妻年齢 カースト	学歴	N/D ローン	ローン ヘッド	妻職業	夫職業	内地出稼・ ラフレ	カ通婚 複婚	社会問題	緩和 評価
11S	45グルン	9 th	N, D	AF(x)	店、手伝い	糖尿病死	—	—	借金過多	Dn
12S	31グルン	Lit	N, D	AF(x)	賃労働	左官	—	—	過剰飲酒	Dn
13	39パファン	5 th	φ	φ	小売商	大学職員	—	—		Up
14	52グルン	9 th	N	SB(x)	賃労、酒造	ベンション	元ラフレ		息子麻薬	Dn
14-1	27ダマイ	8 th	N	SB(x)	筋肉労働	夫ラフレ	弟ラフレ	—		Lf
15S	41グルン	学φ	φ	φ	酒密造	タクシー運転	元ラフレ	—	過剰飲酒	Dn
21	21ダマイ	SLC	N	SB	小売商	夫ラフレ	送金なし	上昇婚	脱会ラフレ	Dn
21-1	31チュエトリ	7 th	ND	AF	羊飼育	バス運転	多々出張			Up
22	40チュエトリ	8 th	φ	SB	茶店	ローラ運転	—	—	夫婦不飲	Up
23◎	33パファン	SLC	N, D	SB(x)	大学職員	大学職員	夫ブローカー	夫再婚	大学ローン	Up
24	40ダマイ	学φ	N, D	AF(x)	労賃者	夫大工	出稼不明	夫複婚	夫妻捨去	Dn
25S	38ダマイ	学φ	N	RS(x)	労賃、農業	農業	—	—	夫不飲酒	Up
31S	55ギリ	8 th	N, D	AP(x)	専業主婦	夫ラフレ	夫ラフレ	—	—	Lf
32S	37シェルバ	学φ	N, D	RB	茶店	夫大工	出稼不明	夫複婚	下降婚	Dn
33S	44チュエトリ	学φ	N	AP(x)	無職	夫大工 息子ラフレ	出稼不明 母へ送金	夫複婚 MC21	下降婚の夫	Lf
34S	36パファン	5 th	φ	φ	野菜商	夫大工	—	—	マオイ爆弾	Dn
35	41ダマイ	学φ	N	AP	野菜生産	夫左官	2子左官	—	夫過飲酒-	?
41	38ギリ	SLC	φ	φ	専業主婦	グルン	夫カタール	カ通婚	肩代ローン	Lf
42	46ギリ	Lit	D	φ	雑貨店	ホテル庭師	2子ドバイ	—	—	Lf
43	32チュエトリ	5 th	D	φ	雑貨酒店	ホテル職員	—	—	上昇婚	Up
44	37タマン	?	D	RS	酒密造販	大学職員	運転出張	夫複婚	先妻放棄	Up
45	45グルン	?	N	AF(x)	賃労	大工	—	夫複婚	先妻放棄	Dn
51	35ギリ	7 th	D	AP	農業	ホテルマン	再レフレ	—	過剰飲酒-	?
51-1	34パファン	9 th	φ	φ	農業、主婦	高校教員	タライ帰還			?
52	24カミ	9 th	φ	φ	主婦		夫ドバイ	—	—	Lf
53	33ギリ	9 th	N, D	SB	雑貨化粧	中学教員	—	—	—	Up
54	37ギリ	8 th	N, D	SB	雑貨商	社会福祉	元Japan	—	—	Lf
55	50チュエトリ	Lit	D	AF	農業、主婦	大学職員	夫飲酒	夫複婚	先妻放棄	Dn

◎：ユニット・リーダー、S：(元)スクンバシ、(x)：ローンヘッド登録上の職業と実際の職業とが異なる。

MC14-1：MC14が大会した後の交替会員 MC21-1：MC21が辞退した後の交替会員

MC51-1：MC51が夫婦でドバイに行った後の代替会員。

貧困緩和評価：(Up)：成功、(Dn)：失敗、(Lf)：ラフレ、(?)：判定不能)